原 著

異なる生活環境による行動特性の変化

—メニエール病と行動特性—

大貫 純一・高橋 正紘・小田桐恭子

和田 涼子・飯田 政弘

Behavioral Characteristics of Another Lifestyle

Junichi Onuki, Masahiro Takahashi, Kyoko Odagiri,
Ryoko Wada, Masahiro Iida

Department of Otolaryngology, Tokai University School of Medicine

In previous study reports, we conducted a questionnaire-based study of patients with Meniere's disease and workers in the industrial company and found several behavioral characteristics specific to the patient group. To confirm our findings, we used the questionnaire in control groups from two other areas, that is, individuals from a farming district ($n=161$) and individuals from an office workers' district ($n=663$), and we compared the results from those with Meniere's disease to the results from the three control groups. As a group, patients showed a significantly strong propensity to immerse themselves in whatever they do, to be perfectionists, to worry before doing something, and to strive to meet superiors' expectations ($p<0.005$). Between the three control groups, we did not find any significant difference in behavioral characteristics. It seems likely that patients with Meniere's disease possess specific behavioral characteristics that are not influenced by daily environmental factors. We think that stress-related behavioral characteristics may be an important underlying cause of Meniere's disease.

Key words: Meniere's disease, lifestyle, behavioral characteristics, questionnaire

はじめに

我々はライフスタイルに関するアンケート調査を行い、メニエール病患者に特異な行動特性が多くみられることを示唆してきた¹⁾²⁾。しかし、対象として扱った一企業の勤労者集団が一般集団を代表するかという指摘があった。メニエール病患者には専業主婦や高齢者もあり、勤労者のみではない。今回我々は、農業を主体とする世帯の多い

自治体と、市街地に近くサラリーマンの多い自治体に同様のアンケート調査を実施し、従来の勤労者集団、メニエール病患者集団と比較したので報告する。

対 象

勤労者集団：神奈川県内の一企業の全従業員に対し、定期健康診断の際にアンケート調査に協力してもらった。有効な回答が得られた3,410名を対象とした。男性が2,373名、女性が1,037名、年齢は19歳～73歳、平均41.3歳であった。

農村地域：神奈川県内の協力を得られた一自治体を対象とした。この自治体は農業を営む世帯が半数以上を占める。20歳以上の住民を対象とし、アンケート調査表を配布した。郵送で回収し、有効な回答の得られた155名を対象とした。男性が71名、女性が84名、年齢は20歳～88歳、平均48.0歳であった。

市街地域：神奈川県内の協力を得られた一自治体を対象とした。この自治体はサラリーマンを中心とした核家族が多く、市街地に近い環境にある。20歳以上の住民を対象とし、アンケート調査表を

配布した。郵送で回収し、有効な回答の得られた639名を対象とした。男性が287名、女性が352名、年齢は20歳～86歳、平均46.5歳であった。

メニエール病患者：複数施設を受診したメニエール病患者102名を対象とした。男性が29名、女性が73名、年齢は19歳～72歳、平均48.7歳であった。メニエール病の診断はメニエール病診断の手引き（厚生省研究班1974年）に基づき診断した。アンケート調査は初診から3ヵ月以内に試行された。

方 法

従来使用したライフスタイルに関するアンケー

表1 行動特性アンケート表

性格や行動についておたずねします。該当するものに○印をつけてください。

0：そうではない 1：まあまあそうである 2：大いにそうである

1	気性が激しい	0	1	2
2	勝気である	0	1	2
3	仕事その他で、他人と競争する気持ちを持ちやすい	0	1	2
4	イライラしたり怒りやすい	0	1	2
5	自分の意見を通そうとする	0	1	2
6	つい人を批判してしまう	0	1	2
7	徹底的にやらないと気がすまない	0	1	2
8	仕事その他に熱中しやすい	0	1	2
9	熱中すると周囲が見えなくなる	0	1	2
10	話したくなると、一気に話さずにはいられない	0	1	2
11	毎日の生活の中で、時間に追われる感じがする	0	1	2
12	歩くのや食べるのが速い	0	1	2
13	休んで何もしないと、気持ちが落ち着かない	0	1	2
14	一度に二つのことをしようとする	0	1	2
15	周囲の目が気になる	0	1	2
16	人前で緊張しやすい	0	1	2
17	人の意見に合わせるほうである	0	1	2
18	親や上司の期待に沿うよう努める	0	1	2
19	嫌なことがあっても我慢する	0	1	2
20	辛いことがあると、避けようとする	0	1	2
21	問題が生じると、他人のせいにしがちである	0	1	2
22	機嫌が悪いと、つい人を責めてしまう	0	1	2
23	取り掛かる前に、いろいろ心配する方である	0	1	2
24	アルコールやカラオケで憂さを晴らす方である	0	1	2

ト用紙を用い、アンケート調査を行った。これは生活習慣、行動特性、ストレス源、気分転換の多寡、自律神経失調的な症状よりなる。そのうち行動特性を比較した(表1)。行動特性の調査項目は、タイプA行動特性のうち、攻撃因子6項目、熱中因子4項目、時間切迫因子4項目、日本人に多いといわれる自己抑制5項目、逃避5項目の計24項目である。各項目について、そうではない、まあまあそうである、大いにそうであるの三つの程度から選択してもらい、各程度の占める割合を集団間で比較した。検定は χ^2 検定を用いた。

結果

行動特性24項目のうち、勤労者、農村地域、市街地域の間で有意差($p<0.01$)を認めた項目はなかった。メニエール病患者群と他の3集団の間で著しい差($p<0.005$)を認めた項目は、徹底的

にやらないと気がすまない(熱中因子)、仕事その他に熱中しやすい(熱中因子)、親や上司の期待に沿うよう努める(自己抑制)、嫌なことがあっても我慢する(自己抑制)、取り掛かる前にいろいろ心配する方である(逃避)の5項目であった(図1)。休んで何もしないと気持ちが落ち着かない(時間切迫因子)はメニエール病患者群と勤労者、市街地域で有意差($p<0.005$)を認め、一度に二つのことをしようとする(時間切迫因子)はメニエール病患者群と勤労者、農村地域で有意差($p<0.005$)を認めた。イライラしたり怒りやすい(攻撃因子)はメニエール病患者群と勤労者の間で有意差($p<0.005$)を認めた(表2)。

考察

メニエール病の原因はいまだ解明されていない

- そうでない
- まあまあそうである
- 大いにそうである

図1

表2 複数の異なる一般集団とメニエール病患者群の行動特性の比較

	勤労者	農村地域	市街地
攻撃因子			
気性が激しい			
勝気である			
競争心が強い			
怒りやすい	**		*
自分の意見を通す			
人を批判する			
熱中因子			
徹底的にやる	**	**	**
熱中する	**	**	**
周囲が見えなくなる		*	
一気に話す	*		
時間切迫因子			
時間に追われる			
食べるのが早い			
休んでいると落ち着かない	**		**
一度に二つのことをする	**	**	*
自己抑制			
周囲の目が気になる			
人前で緊張する		*	
人の意見に合わせる			
期待に沿うよう努める	**	**	**
嫌なことを我慢する	**	**	**
逃避			
辛いことを避ける			
他人のせいにする			
人を責める	*		
いろいろと心配する	**	**	**
酒で憂さを晴らす			

** : $p < 0.005$ * : $p < 0.01$

が、ストレスとの関係を示唆する報告は多い^{3)~5)}。ストレスはストレス源に対してとる対処行動によって生じ、対処行動は各人の行動特性に大きく左右される⁶⁾⁷⁾。行動特性を知ることが、その人がストレスを受けやすい人か否かを判別する目安となる。すべての人は様々なストレス源を持っているが、多くの人はこれに対し何らかの解決方法

を持っており適切に対処する。しかし、ある種の行動特性を有する場合、これらにうまく対応できず、ストレス反応を生じる。タイプ A 行動特性と虚血性心疾患の関係⁸⁾は有名であるが、メニエール病もこのような概念の疾患に当てはまる。我々は勤労者集団との比較でメニエール病患者に特異な行動特性が多くみられることを報告してき

た。しかし、メニエール病患者は勤労者とは限らないため、対象集団で生活環境の異なる可能性のあることを指摘された。今回、生活環境が行動特性に及ぼす影響を知るために、勤労者集団と農村地域、市街地域の間で調査比較したが、行動特性に差はみられなかった。他の企業集団に対し同様のアンケート調査を行った過去の報告では各年代で同じ傾向を示し、性差もなかった⁹⁾¹⁰⁾。このことから、行動特性は生活環境や年齢、性別の影響が少ないと考えられる。どの環境、年代、性別でも、一定の割合で同じような特異な行動特性を持つ人物が存在すると考えられる。これらの人はストレス源に上手に対処できないため、自律神経失調的な身体症状を生じる。メニエール病の発症、増悪にも行動特性の関与が強く示唆された。発症した患者はこのような行動特性の偏りの大きい集団の一部と考えられる。

メニエール病患者の特異な行動特性として、他人の目を気にし、期待に沿うように努める、事前に必要以上に心配しやすく、物事に熱中し、とことんやらないと気がすまないというような人物像が浮かび上がる。親や上司の期待に沿うよう努力するが、期待どおりの評価が得られないと報酬不足がストレス反応となる。日本人のタイプ A 行動特性は米国人のそれと比べ受動的である。タイプ A 行動特性の熱中因子と、自己抑制、いわゆるイイ子行動特性が強くみられる。米国人のタイプ A 行動特性は独立した自由な個人として、自己主張し、他と敵対し、競争し、攻撃し、社会的に成功することに懸命になる。つまり、個人の成功を得るために能動的である。一方日本人は、むしろ“つきあい”での急ぎ病であり、熱中的に、徹底的に、多くを求めて仕事中毒になり、他からの誘いを断れず、約束したことは破らないという強い義務感を持っている⁶⁾。我々のアンケート調査はこの特徴と同様の結果を得、メニエール病がストレスに関与して発症する疾患であることを裏付けている。ながらくストレスが云々されてきたメニエール病であるが、ストレスの本体は不明であった。今回の調査から、メニエール病の発症要因として、行動特性が一段と重みを増したことになる。

これらのことから当院では生活指導を行っている。生活指導によりストレス源に対する対処行動

の改善やストレス発散を目指している。これら治療成績の蓄積が今後の課題であるが、メニエール病を治癒するために有用な方法のひとつと考えている。

ま と め

1. メニエール病患者の対象群として勤労者、農村地域、市街地域を選び、ライフスタイルに関するアンケート調査を行い、患者群と比較した。

2. 対象群である勤労者、農村地域、市街地域間では、行動特性に差はみられなかったが、メニエール病患者群のみに特異な行動特性がみられた。行動特性は生活環境に影響されないことが判明した。

3. メニエール病を発症させたり増悪させるストレスは、行動特性の歪で生まれることが強く示唆され、生活指導によるライフスタイルの改善が必要と結論された。

文 献

- 1) 大貫純一，高橋正紘，山下裕司：勤労者3,400名における行動特性，ストレス源，ならびに身体症状のアンケート調査結果．前庭機能異常に関する調査研究班平成12年度研究報告書：57-60, 2001
- 2) 高橋正紘，大貫純一，小田桐恭子，他：一般勤労者と内リンパ水腫患者のライフスタイル・アンケートの比較．前庭機能異常に関する調査研究班平成13年度研究報告書：73-76, 2002
- 3) 水越鉄理，猪 初男，石川和光，他：厚生省特定疾患メニエール病調査研究班によるメニエール病の疫学調査と症状調査．耳鼻臨床 70: 1669-1686, 1977
- 4) 渡辺 勲，水越鉄理，大久保仁，他：前庭機能異常に関する疫学調査報告—個人調査集計を中心に—．耳鼻臨床 76: 2420-2457, 1983
- 5) 渡辺行雄，水越鉄理，中川 肇，他：メニエール病の症例対照調査結果—メニエール病確実例と対照例：めまい症例，一般症例，健常者との比較を中心に—．Equilibrium Res Suppl 7: 1-10, 1991
- 6) 宗像恒次：健康と病気の社会，心理，文化背景．最新行動科学からみた健康と病気．1-54頁，メヂカルフレンド社，東京，1996
- 7) 宗像恒次：ストレスと対処行動．医療・健康

- 心理学. 中川米造, 宗像恒次編. 1-21頁, 福村出版, 東京, 1989
- 8) Friedman M, Rosenman RH: Association of specific overt behavior pattern with blood and cardiovascular findings; blood cholesterol level, blood clotting time, incidence of arcus senilis, and clinical coronary artery disease. J Am Med Assoc 169: 1286-1296, 1959
- 9) 山下裕司, 菅原一真, 下郡博明, 他: メニエール病患者の行動特性について—アンケートによるストレスの定量化—. Equilibrium Res 57: 428-434, 1998
- 10) 石田克紀, 飯田政弘, 高橋正紘, 他: メニエール病と行動特性. 耳鼻臨床 94: 11-15, 2001
-
- 原稿到着: 平成16年2月4日
別刷請求先: 大貫純一
〒259-1193 神奈川県伊勢原市望星台
東海大学医学部耳鼻咽喉科学教室
E-mail: 0amcd001@is.icc.u-tokai.ac.jp